

英語発音指導における目標の変遷

安藤 香織

1. 英語の国際語化と多様化

英語は現在、政治や経済、スポーツ、文化など様々な分野において国際コミュニケーションツールとして世界中で使用されている。英語を国際語の地位に押し上げている要因の1つに、第2言語（English as a second language (ESL)）としての使用者および外国語（English as a foreign language (EFL)）としての使用者が他の言語（中国語など）に比べ圧倒的に多いということがあげられる。Crystal（2003）と Graddol（1997）では英語非母語話者と英語母語話者の比率を2：1から4：1と推計している。

また英語は国際語化だけでなく、多様化も進んでいる点に留意しなければならない。Kachru（1985）は多様な英語をその分布や機能に応じて3つのグループに分類したモデルを提案し（図1）、それぞれのグループを以下のように説明している。

The Inner Circle refers to the traditional cultural and linguistic bases of English. The Outer Circle represents the institutionalised non-native varieties (ESL) in the regions that have passed through extended periods of colonisation... The Expanding Circle includes the regions where the performance varieties of the language are used essentially in EFL contexts. (Kachru, 1985, pp. 366-367)

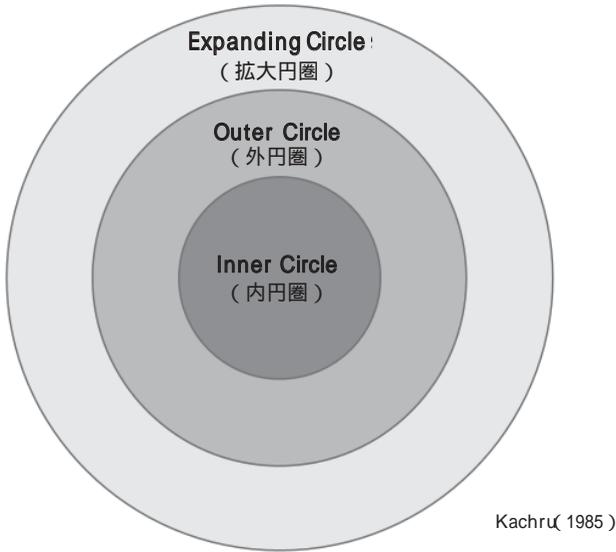


図1 Kachruの3円モデル

Outer Circle の英語には、しばしばそれぞれの国や地域で歴史的に確立されたモデル (institutionalised non-native varieties) があり、以前の英語 variety の議論は主にこれら Outer Circle で使われている英語に関して行われていた。母語話者の使う言語規範からの大きな逸脱は相互理解の妨げになるとし、母語話者英語の正当性を主張する意見 (Quirk, 1985 など) がある一方、それぞれの地域で使用されている英語の多様性を認めるべきだとする意見 (Smith, 1976 など) もある。近年、Expanding Circle における英語使用者数の増加に伴い、多様性の議論は Expanding Circle の英語使用者の英語にも広がりを見せており、国際コミュニケーションツールとしての英語はどうあるべきか様々な研究が行われている。

2. 国際コミュニケーションツールとしての英語の発音

2-1. 発音指導における目標設定

外国語教育の発音指導では、その目標設定において相反する2つの考え方があある。1つは、Levis (2005) が *nativeness principle* と呼ぶ目標言語の母語話者のような発音を習得することは可能であり、それを目標にすべきだという考え方である。その際、学習者の母語訛りは失くすべきとされる。もう一方は *intelligibility principle* (Levis, 2005.) と呼ばれ、基本の考えは「...learners simply need to be understandable.」(Levis, 2005, p. 370) であり、学習者の母語訛りはコミュニケーションの妨げとならない限り、問題とはされず発音指導の対象とはされないもしくはその指導の優先順位は低いというものである。

2-2. 発音指導における目標の変遷

英語の国際語化は発音指導にも影響を与えた。ここでは、1950年以降の欧米の英語（主にESL）教育を、i) *nativeness principle* が主流であった1950年代、ii) 発音指導が軽視された1960年代-1970年代、iii) *intelligibility principle* が主流になった1980年代以降の3期に大別し (Celce-Murcia, Brinton & Goodwin, 1996, 大和, 2003 など)、それぞれの時代の発音目標およびその時代の主流教授法を概観していく。

表1 発音学習の目標の変遷

	発音指導の主流
(i) 1950年代	<i>nativeness principle</i>
(ii) 1960年代-1970年代	発音指導：軽視
(iii) 1980年代-	<i>intelligibility principle</i>

(i) 1950 年代

この時期の発音指導は、英語母語話者のような正確かつ流暢な発音が目標とされた。この時期の英語教育の主流であったオーディオリンガル・アプローチ (audiolingual approach) では、スピーキング能力とリスニング能力の向上にまず焦点が置かれ、発音指導は学習の初期の段階から重視される。またその際、教師は発音記号などの明示的な言語情報を提供し学習者の発音習得を助けることが推奨される。

本アプローチの指導法およびその手順は、背景理論である行動主義心理学と構造主義言語学に基づいている。行動主義心理学に基づき、言語習得も習慣形成の機械的なプロセスと考え、刺激 (i.e. 与えられる目標言語の情報) と反応 (i.e. 与えられた情報に対する学習者の反応) がうまく結びついた時に学習が成立し、さらに強化 (reinforcement) することで習慣形成が定着すると考える。また構造主義言語学に基づき、言語体系の差異に注目する。その結果、本アプローチでの具体的な指導方法は①口頭による導入、②模倣・暗記、③パターンプラクティス (反復)、④最小対立練習、⑤理解の確認の5つであり、これらを順番通りに行うことで、必要な基礎力を身につけるとしている (濱、2017)。

本アプローチはクラスサイズに影響されないなどの利点がある一方、模倣・反復練習が多く授業が単調で機械的になりがちであることや、発話の意味に対する意識が不在になりがちなため実際の会話に活用できない可能性があるといった点が指摘され (伊藤、1976)、長期的なコミュニケーション能力の育成には至らないとその人気は低下していった。

(ii) 1960 年代-1970 年代

1960 年代に入ると認知主義アプローチ (cognitive approach) が盛んになった。その背景には生成文法関連の研究や、人間の言語活動はオーディオリンガル・アプローチが背景理論とした行動主義心理学が唱える「刺激と

反応」では説明できないとする認知心理学の人气が高まったことがあげられる。本アプローチでは言語学習は習慣の形成ではなく規則の習得と考えられる。

この時期、発音指導は軽視または完全に指導の対象から外される傾向にあった。その背景には Critical Period 関連の研究 (Lennerberg, 1967, Scovel, 1969 など) の高まりがある。臨界期仮説 (Critical Period Hypothesis) によると脳が発達するに伴って母語話者のような言語能力の習得が可能かどうかを分ける境界 (critical period) が存在し、その境界線を越えてから学習を開始した場合、母語話者のような言語能力を身に付けることは不可能とされる。臨界期仮説に関しては言語の領域によるという研究 (Walsh & Diller, 1978 など) も多く報告されているが、音韻体系の習得に関しては臨界期の存在を主張する研究が多い (Asher & Garcia, 1969 など)。その結果、ある一定の年齢以上の学習者には発音は教えることができないもしくは非常に難しいと考えられ、学習可能と考えられる文法や語彙の指導・習得に重点が置かれた。

近年では、境界 (critical period) を越えてから学習を開始した場合でも、動機付け、言語適性、学習環境次第では母語話者のような発音を習得できる可能性があるとされている (今仲、2014)。

(iii) 1980 年代以降

1980 年代に入ると発音指導の必要性和重要性が再び唱えられるようになった (Celce-Murcia et al., 1996)。その背景の 1 つにはコミュニカティブ・アプローチ (communicative approach) の台頭がある。このアプローチでは口頭コミュニケーションに焦点が置かれる。そして発音が一定のレベルに達していないと、どんなに文法や語彙が正確でも口頭でのコミュニケーションが困難になる (Hinofotis & Bailey, 1980) として発音はコミュニケーションに不可欠な要素として扱われる。発音目標は、コミュニケーション

ョンが主目的であるなら母語話者のような発音を目指すことは必ずしも学習者の望みを反映しているとは言い難く、また可能であっても時間がかかる (Field, 2005) とされ、intelligibility principle が主流となった。

2-3. 国際語としての英語と intelligibility

nativeness principle が優勢だった頃の研究の中心は学習者の発音上のエラー (i.e. 英語母語話者の発音と違う箇所) を分析・分類し、エラーの原因の解明および回避策を考案することにあった。しかし intelligibility principle へと移行するにつれ、母語話者の発音にいかにも似せるかではなく、聞き手がどれほど聞き取れるか、理解できるかなど研究の焦点は聞き手にも広がりを見せている。英語の国際化に伴い、誰に対する intelligibility を目指すのか、適切な設定が必要である。

上述したように、近年英語非母語話者による英語の使用が増えており、多くの英語学習者にとって英語を使ってコミュニケーションを取る相手は英語非母語話者である可能性が高い。そのため、国際語としての intelligibility principle では、英語母語話者に対する intelligibility だけでは不十分であり、共通の母語を有しない英語非母語話者に対する intelligibility も目標に含むことを考慮すべきである (Jenkins, 1998)。

3. intelligibility の概念

Jenkins (2000) や Issacs (2008) が指摘しているように、intelligibility の定義はまだ確立されておらず、そのため研究者によって定義や用語の使い方に違いが見られる。表 2 に先行研究における intelligibility および関連する概念の定義をまとめた。Catford (1950)、Smith and Nelson (1985)、Field (2003) では、intelligibility は発話における単語や文レベルの要素の認識を意味しているが、Bamgbose (1998) の定義では、さらに「意味が分かるこ

表2 先行研究における用語の定義

	Catford (1950)	Smith and Rafiqzad (1979)	Smith and Nelson (1985)	Bamgbose (1998)	Field (2003)
intelligibility	話者の言った単語 に対すする聞き手の 理解	自然な速さで話さ れたもしくは講ま れた文中の単語を 理解する能力 (p. 371)	単語および発話の 認識 (p. 334)	表現を認識し、その意 味を理解し、話された 社会状況下でその意味 が何を表すのかを理解 すること (p. 11)	メッセージの内容がど のくらい認識されるか (p. 35)
effectiveness	話者の意図に対す る聞き手の理解	N/A	N/A		話者のメッセージが、 語彙の適切さ、構文の 適切さや正確さ、語用 の精度や基本的な発言 項目がどれくらい理解 されるか (p. 35)
comprehensibility	N/A	intelligibilityより はるかに多くのこと が関係する (p. 371)	単語および発話の 意味 (p. 334)	N/A	N/A
interpretability	N/A	N/A	単語および発話の 裏の意味 (p. 334)	N/A	N/A

Catford (1950), Smith & Rafiqzad (1979), Smith & Nelson (1985), Bamgbose (1998), Field (2003) より作成 [筆者訳]

と、「その社会文化状況における意味を理解すること」も含めて intelligibility としている。これは Smith and Nelson (1985) の枠組みにおける、intelligibility、comprehensibility、interpretability の3概念が合わさったものに等しい。Kachru and Smith (2008) では電話での会話を例に用いて、これらの概念を以下のように説明している。電話が鳴り、「Is Sean there?」と尋ねられた際、「Yes, he is」という答えでは、intelligibility と comprehensibility は高いと考えられる。しかし電話の相手の「Sean と話したい」という意図が理解できていないと考えられるため、interpretability は低くなる。interpretability の高い返答の例として「One moment please」をあげている。

Gass and Varonis (1984) が指摘しているように、comprehensibility には発音以外にも文法などいくつかの要素が影響する可能性があり、interpretability には社会文化状況に関する知識が必要になる。つまり、これら2つは純粋に発音だけによって達成できるものではない。発音指導を行う際には、これら3つの概念を区別して考えることが必要と思われる。

4. 日本における発音モデルの変遷

ここでは1950年以降の日本の中等教育における発音モデルの変遷を追い、使用されていた発音モデルを概観する。その際の資料として、昭和33年改訂版（初めて「試案」という言葉がなくなった学習指導要領）以降の、中学校学習指導要領および高等学校学習指導要領の「言語材料」の記述内容を用いる。

表3は昭和33年版から平成29年版までの計7版の中学校の学習指導要領における言語材料の発音に関する記述内容を抜粋したものである。

昭和33年改訂版および昭和44年告示版での言語材料は「現代のイギリスまたはアメリカの標準的な発音」とされている。つまり、この時代の授業で使用されていた言語材料は「イギリス」または「アメリカ」と地域が

表3 発音に関する「言語材料」の記述内容（中学校学習要領）

版	「言語材料」
昭和33年改訂版	現代のイギリスまたはアメリカの標準的な発音
昭和44年告示版	現代のイギリスまたはアメリカの標準的な発音
昭和52年告示版	現代の標準的な発音
平成元年告示版	現代の標準的な発音
平成10年告示版	現代の標準的な発音
平成20年告示版	現代の標準的な発音
平成29年告示版	現代の標準的な発音

限定された英語母語話者の発音であったと考えられる。その後、昭和52年告示版以降の5版では地域を特定する部分が消え、「現代の標準的な発音」へとモデルが変更した。「現代の標準的な発音」について、平成29年告示版中学校学習指導要領解説では以下のように説明している。

英語は世界中で広く日常的なコミュニケーションの手段として使用され、その使われ方も様々であり、発音や用法などの多様性に富んだ言語である。その多様性に富んだ現代の英語の発音の中で、特定の地域やグループの人々の発音に偏ったり、口語的過ぎたりしない、いわゆる標準的な発音を指導するものとし、多様な人々とのコミュニケーションが可能となる発音を身に付けさせることを示している。(30頁)

次に高等学校学習指導要領に記載されている言語材料を表4にまとめる。「発音」という単語は見つからないが、言語材料の項目の「現代の標準的英語」は、文法や語彙だけではなく音声面に関しても当てはまると考える。

昭和35年告示版から平成29年告示版までの7版全てで、言語材料は「現代の標準的な英語」とされている。また平成11年告示版以降の3版に

表 4 高等学校学習指導要領の言語材料の記述内容

版	「言語材料」
昭和 35 年告示版	現代の標準的な英語
昭和 45 年告示版	現代の標準的な英語
昭和 53 年改訂版	現代の標準的な英語
平成元年告示版	現代の標準的な英語
平成 11 年告示版	現代の標準的な英語
平成 21 年告示版	現代の標準的な英語
平成 29 年告示版	現代の標準的な英語

は、「ただし、様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮すること。」と英語の多様性を認識している旨が書き加えられている。これらについて平成 29 年告示版高等学校学習指導要領解説では次のように説明している。

「現代の標準的な英語」とは、現在国際的に広く日常的なコミュニケーションの手段として通用している英語を意味しており、特定の地域や集団においてしか通用していない方言などに偏らない英語のことである。一方、「様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮する」とは、現代の英語は、世界で広くコミュニケーションの手段として使われている実態があり、語彙、綴り、発音、文法などに多様性があるということに気付かせる指導を行うということである。（131 頁）

中学校学習指導要領および高等学校学習指導要領の両方において、国際的な言語としての英語の地位を認め、英語の多様性を認識している旨が確認できる。しかし、その多様性が ENL (English as a native language) の範疇におけるものなのか、それとも ESL や EFL の多様性も含むのかは不明で

ある。このことについて、竹村（1996）では授業で使用される「標準的な英語」はイギリスの標準英語または一般アメリカ英語を差しているとし、伊東（2009）では、アジアにおける「現代の標準的な発音」は一般アメリカ英語を差すと述べている。

5. おわりに

英語の国際語化や多様化、発音指導の目標の変遷に伴い、英語学習者の多くにとって、多様な母語訛りを有する相手と英語を通してコミュニケーションを取る可能性が高まっている。そのような多様な英語に対し肯定的かつ寛容的な態度を育むこともこれからの発音指導の課題としてあげられるのではないだろうか。多様性に富んだモデルは学習者を混乱させるという意見がある。しかし、EFLの環境にある学習者に対し英語母語話者のモデルのみを授業内で示せば、それを唯一のモデルとして学習者が捉えてしまう危険性があり、そこからの逸脱を「エラー」と感じ、外国語訛りのある発音に対し否定的な印象を抱いてしまう可能性があるのではないだろうか。多様な英語を効果的に授業に導入する方法の考察が必要ではないだろうか。

引用文献

- Asher, J., & Garcia, R. (1969). The optimal age to learn a foreign language. *Modern Language Journal*, 53, 334-341.
- Bamgbose, A. (1998). Torn between the norms: innovations in world Englishes. *World Englishes*, 17, 1-14.
- Catford, J. (1950). Intelligibility. *English Language Teaching Journal*, 1, 7-15.
- Celce-Murcia, M., Brinton, D., & Goodwin, J. (1996). *Teaching Pronunciation: A Reference for Teachers of English to Speakers of Other Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (2003). *English as a Global Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Field, J. (2003). The fuzzy notion of 'intelligibility': A headache for pronunciation teachers and oral testers. *IATEFL Special Interest Groups Newsletter*, 34-38.
- . (2005). Intelligibility and listener: The role of lexical stress. *TESOL Quarterly*, 39,

- 399-423.
- Gass, S. & Varonis, E. M. (1984). THE EFFECT OF FAMILIARITY ON THE COMPREHENSIBILITY OF NONNATIVE SPEECH, *Language Learning*, 34 (1), 65-89.
- Graddol, D. (1997). *The Future of English?* The British Council.
- Hinofotis, F., & Bailey, K. (1980). American undergraduate reactions to the communication skills for foreign teaching assistants. In J. Fisher, M. Clarke & J. Schacter (Eds.), *On TESOL '80: Building bridges*, Washington: TESOL Publications.
- Issacs, T. (2008). Towards Defining a Valid Assessment Criterion of Pronunciation Proficiency in Non-Native English-Speaking Graduate Students', *Canadian Modern Language Review*, 4.
- Jenkins, J. (1998). Which pronunciation norms and models for English as an International Language? *ELT Journal*, 53(2), 119-126.
- . (2000). *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Kachru, B. B. (1985) Standards, codification and sociolinguistic realism: the English language in the outer circle. In R. Quirk and H.G. Widdowson (Eds), *English in the world: Teaching and learning the language and literatures*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kachru, Y. & Smith, L. E. (2008). *Cultures, Contexts, and World Englishes*. New York: Routledge.
- Lenneberg, E. (1967). *Biological foundations of language*. New York: John Wiley.
- Levis, J. (2005). Changing contexts and shifting paradigms in pronunciation teaching. *TESOL Quarterly*, 39, 369-377.
- Quirk, R. (1985). The English language in a global context. In R. Quirk & H.G. Widdowson (Eds.), *English in the world: teaching and learning the language and literatures*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Scovel, T. (1969). Foreign accents, language acquisition, and cerebral dominance. *Language Learning*, 28, 129-142.
- Smith, L. (1976). English as an international auxiliary language. *RELC Journal*, 7(2), 38-43.
- Smith, L.E., & Nelson, C. (1985). International intelligibility of English: Directions and resources. *World Englishes*, 4, 333-342.
- Smith, L.E., & Rafiqzad, K. (1979). English for cross-cultural communication: The question of intelligibility. *TESOL Quarterly*, 13, 371-380.
- Walsh, T.M., & K.C. Diller (1978). Neurolinguistic Foundations to Methods of Teaching a Second Language. *International Review of Applied Linguistics*, 16, 1-14.
- 伊藤健三 (1976) 「英語教育の歴史」中島文雄監修『講座・新しい英語教育1』大修館書店。
- 伊東弥香 (2009) 「第9章 発音指導」JACET 教育問題研究会 (編) 『新英語科教育の基礎と実践』三修社、82-91。
- 今仲昌宏 (2014) 「英語発音習得における成人学習者の抑制要因」『東京成徳大学研究紀要』21、1-12。
- 竹村滋 (1996) 『英語音声学』研究社。
- 濱雪乃 (2017) 「英語教育における CLT を中心としたコミュニケーション能力の育成をめぐる一考察—小学校教育への展望—」『お茶の水女子大学 人間発達研究』、22-37。
- 大和知史 (2003) 「英語発音における明瞭性：再考」『明石工業高等専門学校研究紀

要』 46、143-149。